FUKUI PREFECTURAL MUSEUM NEWS

ふくいミュージアム

2021.6.25　No.63

令和３年度夏季特別展

福井県野球物語 ―甲子園をめざした高校球児たち―

野球は、明治初期に日本に伝えられ、明治時代の終わりごろには全国に広まりました。福井県では明治時代中ごろに、福井師範学校で野球とみられるゲームがおこなわれたことが始まりとされます。その後、武生中等学校をはじめとする県内の中等学校に野球部が創設され、各地で対抗試合がおこなわれるようになりました。

大正4年(1915)に初めての中等学校野球の全国大会が開催され、大正13年に甲子園球場が完成し、全国大会の会場とされました。県内各校も甲子園出場をめざし、大正14年に敦賀商業学校が本県初の甲子園出場を果たしました。同校はその後連続出場し、全国にその名を広めました。地元では球児たちへの熱狂的な応援が広まり、福井でも野球ブームが盛り上がりました。

昭和戦時期に一時中断した全国大会は、昭和21年(1946)に再開され、昭和23年からは全国高等学校野球選手権大会として現在まで開催されています。これまで多くの県内の高等学校も出場し、活躍してきました。全国大会で活躍する球児たちの姿は、地元福井のアピールとともに、県民の一体感を醸成する機会ともなったといえます。本展では、高校野球を中心に、明治から平成にかけての本県の野球の歴史を紹介します。

1.野球部の創設から全国大会へ ―明治から昭和戦前期―

福井県内の中等学校(旧制中学)に野球部が創設されたのは、明治30～40年代です。このころ、県内には、福井師範学校、福井中学校、福井商業学校、武生中学校、小浜中学校、大野中学校、北陸中学校、敦賀商業学校、そして大正11年(1922)創立の三国中学校がありました。その中で、圧倒的な強さを誇ったのが敦賀商業学校です。同校は、大正14年の第11回全国大会に初出場して以来、昭和9年(1934)までに10回連続で出場しており、敦賀商業の名は全国に知れわたりました。この敦賀商業を破って、昭和11年の第22回大会に初出場を成し遂げたのが福井商業学校です。この時、北陸大会で優勝し甲子園出場が決定すると、地元福井市民は大いに盛り上がり、市内をパレードするなど、歓喜の渦につつまれました。

ここでは、明治末期から昭和戦前期にかけての県内中等学校の野球部の歴史と大正末期から昭和戦前期に全国大会へ出場した学校を紹介します。

敦賀商業学校野球部写真　昭和4年(敦賀市立博物館蔵)

2.甲子園の土を踏む ―昭和戦後から平成へ―

戦時中の昭和17年(1942)以降に中断した全国大会は、昭和21年には復活、翌年には選抜大会も再開されました。翌昭和22年の学制改革により、中等学校が新制の高等学校に替わり、中等学校野球は高校野球と呼ばれるようになりました。県内でも各高校野球部が新たなスタートを切り、昭和24年には武生高校が甲子園初出場、翌年には若狭高校が初出場しました。さらに、翌々年には敦賀高校(敦賀商業学校などを統合して開校)も、敦賀商業時代を含めて12回目の出場を果たしました。その後、昭和44年にかけて、武生・若狭・敦賀高校の3校が春と夏の甲子園大会に出場

し、準々決勝まで勝ち進んだ学校もでてきました。また、昭和32年には、三国高校がこの強豪3校の壁を破って、初出場を果たしています。さらに、昭和46年には美方高校も初出場しました。

昭和50年代以降、甲子園大会に連続出場するようになったのが、福井商業高校です。昭和46年の選抜大会に初出場して以来、昭和62年から平成元年(1989)にかけては毎年春夏連続出場しています。とくに、昭和53年の選抜大会では、準優勝という快挙を成し遂げています。現在までに38回の出場実績があり、全国に福井商業高校の名が知られています。また、この時期には、福井高校(昭和51年)、北陸高校(昭和58年)、大野高校(平成2年)が甲子園大会初出場を果たしています。ちなみに、県内の野球部のある高校は昭和32年に16校でしたが、63年には約2倍の30校と増加しました。この中には、後一歩のところで甲子園の土を踏むことができなかった学校も少なくありません。

そして、平成に入り、甲子園出場常連校の福井商業高校などに肩を並べる存在になったのが敦賀気比高校です。同校は野球部創設9年目の平成6年夏の大会に初出場して以来、現在まで春夏合わせて17回出場し、平成28年の選抜大会では、福井県高校野球で初の優勝旗を持ち帰りました。また、春江工業高校(平成25年)、坂井高校(平成29年)、啓新高校(令和元年)が甲子園大会初出場を果たしています。

ここでは、戦後から現在までに甲子園大会に出場した県内各高校の活躍ぶりと、それを応援した人びとの姿を紹介します。

第87回選抜大会優勝旗(複製)　(敦賀気比高等学校蔵)

3. プロ野球での活躍
―福井ゆかりの選手たち―

大正9年(1920)、日本で初めてのプロ野球団が設立されました。その後、現在の球団につながる球団が東京・名古屋・大阪で設立され、昭和11年(1936)にはプロ野球リーグとして日本職業野球連盟が組織され、現在のようなペナントレース(公式戦)がはじまりました。戦前戦後を通じて多くのプロ野球団が設立されましたが、現在はセントラルリーグとパシフィックリーグで12の球団が、毎年ペナントレースを繰り広げています。

こうしたプロ野球にあこがれ、野球を職業として選んだ球児たちが数多くいました。福井県内からも、昭和初期から現在に至るまで、多くの高校球児たちがプロの道へ進み、野球人として活躍しました。

昭和前期には、敦賀商業学校出身の球児たちがプロ野球団に入団しています。阪神タイガースの主将をつとめ、後に監督に就任した松木謙治郎、春夏合わせて連続5回にわたって甲子園に出場し、金鯱軍(名古屋)の4番打者となった小林利蔵など6名が同校出身者でした。昭和20年代後半から40年代にかけては、武生・若狭・敦賀高校出身者が多くみられます。武生高校からは、牧野伸・斎藤祐一・田中平八郎の3名が東映フライヤーズ、敦賀高校からは「ヒゲ辻」の愛称で親しまれた阪神の辻佳紀、若狭高校からは阪神の川藤幸三や西鉄ライオンズの乗替寿和などがいます。いずれも、この時期に甲子園大会に出場した高校出身者です。昭和50～60年代は、甲子園大会出場のない鯖江高校出身で大洋ホエールズに入団した杉永政信や阪神入団の丸岡高校出身の赤松一朗などが挙げられます。平成に入ると、中日ドラゴンズに入団した大野高校出身の正津英志をはじめとして、広島カープに入団した福井商業高校出身の横山竜士などがいます。その後、圧倒的に数多くプロ入りしたのが敦賀気比高校出身者です。巨人入団の内海哲也、広島入団の東出輝裕を始めとして、近年ではオリックスの吉田正尚などはよく知られています。そのほか、春江工業高校出身でソフトバンクの栗原陵矢なども、現在活躍中です。

ここでは、県内高校出身のプロ野球人が着用したユニホーム等、各選手にちなんだ資料を展示紹介します。

(山形裕之)

辻佳紀氏(阪神タイガース)ユニホーム(甲子園歴史博物館蔵)

館蔵資料紹介

徳川秀忠黒印状
土屋数直書状

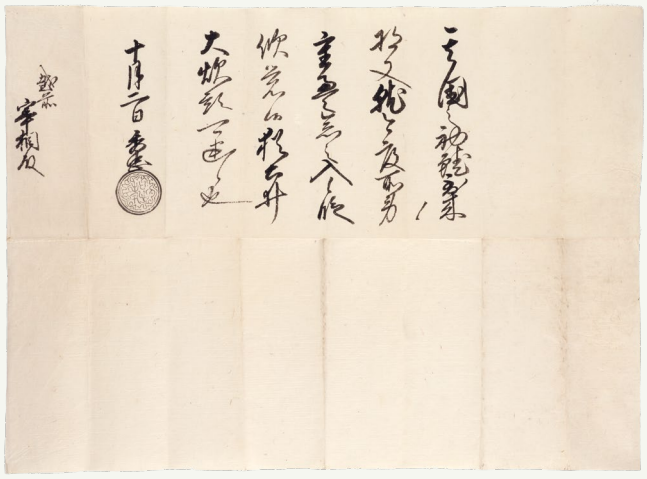
［法　量］縦45.4×横62.0(㎝)　［時　代］江戸時代前期

［法　量］縦40.6×横56.1(㎝)　［時　代］江戸時代前期

昨年、新規購入した資料2点（一括）を紹介します。いずれも新出資料となります。

1点目は徳川秀忠黒印状です。差出は江戸幕府2代将軍の徳川秀忠です。「秀忠」の署名と、「忠孝」の黒印が見えます。一方、宛先は「越前宰相殿」です。これは誰でしょうか。宰相とは朝廷の官職である参議の唐名で、秀忠が将軍であった慶長10年（1605）から元和9年（1623）までの期間で参議に就いていたのは、福井藩2代藩主の松平忠直となります。つまり、秀忠から忠直へ宛てた黒印状です。日付は10月2日で、内容は「越前国の初鮭が到来しました。また、この度の病気につき重ねて丁寧な対応があったことは喜ばしい。なお、詳しくは土井大炊頭（利勝）が申します」と礼を述べたものです。当時の越前の産物として鮭が確認され、その初鮭が将軍家への贈答品として用いられていた点が注目されます。なお、紙は大高檀紙（おおたかだんし）と呼ばれる和紙で、大きくしっかりとし、将軍家の風格が漂います。それを横半分に折った折紙（おりがみ）と呼ばれる形態です。

2点目は土屋数直書状です。差出は常陸土浦藩主で老中も務めた土屋数直、他方、宛先は福井藩家老を務めた越前府中本多家3代の本多長員（ながかず）です。文中に長員が跡を継いだとあり、日付は寛文9年（1669）7月23日と判明します。当時、長員はわずか1歳でした。内容は「継目祝儀として使者が到来し、奉書紙二十束と内蔵助（長員の父・昌長）の遺物として国行の腰物が献上されました。各々が相談して将軍へ披露したところ、一段と喜ばしいとのことでした」と礼を述べたものです。やはり、当時の越前の産物である奉書紙が将軍家への贈答品として利用されていた点が注目されます。越前とくに五箇地区（現、越前市）は和紙の産地として早くから知られ、厚手の楮紙である越前奉書は当時、日本第一と高く評価されていました。なお、本資料も折紙の形態で、包紙が付属しています。　（大河内勇介）



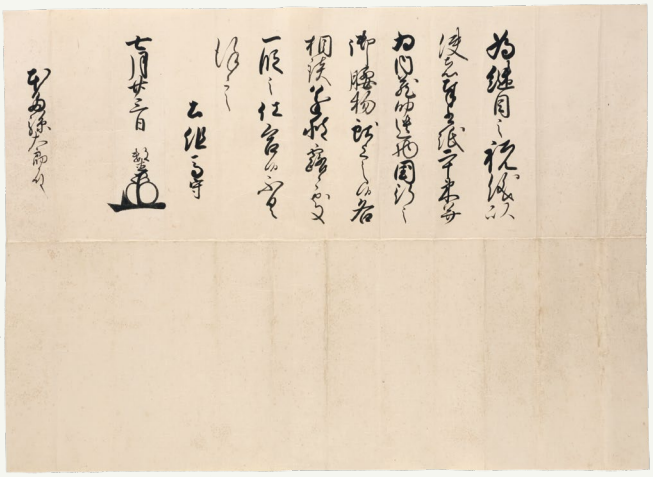
徳川秀忠黒印状

「其国之初鮭到来候、
将又就今度所労
重畳念之入候段
欣覚候、猶土井
大炊頭（利勝）可述候也、

十月二日　秀忠（徳川）（黒印）

越前
宰相殿（松平忠直）

」



土屋数直書状

「為継目之祝儀以
使者奉書紙二十束幷
為内蔵助（本多昌長）遺物国行之
御腰物献上之候、各
相談遂披露之処、
一段之仕合候、不具、
謹言、

土屋（土屋）但馬守

七月廿三日（寛文九年）　数直（花押）

本多孫太郎（長員）殿

」

研究ノート

「解体新書」末尾の書籍広告

［本体法量］縦25.9×横17.8(㎝)

(1)「解体新書」末尾の広告

「解体新書」は日本医学史上で著名な書物ですから、全国で開催されてきた医学関係の展覧会で実物を見たという方も少なくないと思います。

この本に関わった杉田玄白と中川淳庵が若狭小浜藩の藩医であることから、福井県においては「解体新書」を郷土の偉人による作品として県内の複数の施設で所蔵し、閲覧・公開に供しています。具体的には、小浜市立図書館で2揃、福井県立図書館、福井県立若狭歴史博物館、福井県立歴史博物館で各1揃を所蔵しています。

「解体新書」は本文編4冊と図1冊の計5冊で1揃ですが、本に掲載されたり、展示されている頁は大抵いつも決まったところです。すなわち、書名の題箋が貼ってある表紙、本文編の中表紙か奥付(杉田玄白たちの名前が記されている部分)と本文、図編の解剖図扉絵(画像a)と人体の図であるのが通常で、それ以外はまず公開される機会もないと思います。

たしかに、解剖図の詳細さは大変に見栄えがします。しかし、こうした目立つ頁以外に「解体新書」にはまだ面白い部分があるのです。

それはどこか。本文編4冊目の最後にある書籍の一覧表、版元である須原屋市兵衛が出版した本の「広告」(画像b)です。地味ですが興味深いと私は思うのです。

本の末尾に掲載される本の「広告」というと不思議な印象を受けるかもしれません。今でも新書などの終わりに関連書籍の紹介頁がありますが、それが一番イメージに近いでしょう。

さて、かつて私は上記の施設が所蔵する「解体新書」の質、つまりどれが初版本に近いのかという問題に興味があって、県内の「解体新書」を見て回ったことがあります。

その際、福井県立歴史博物館本(以下、県博本)を手にとって閲覧し、県内ではこの県博本だけにこの広告があることに気がつきました。

その時は、これがどうにも腑に落ちない感じがして、この「解体新書」に疑わしい視線すら投げかけていました。

ところが、最近、松田泰代「蔵版目録の分析による刷年代識別法—書肆須原屋市兵衛の蔵版目録を事例として」(『書物・出版と社会変容』8、2010年)に接して、県博本の価値を再考しなくてはと思うようになりました。

そこで、「解体新書」については既に『ふくいミュージアム』13号(1988年)「収蔵資料紹介　解体新書(全五冊)」、同15号(1989年)「研究ノート　解体新書と小田野直武」(ともに貴志真人氏執筆)に記事がありますが、改めて取り上げたいと思います。

(2)県内の「解体新書」

県博本を詳しくみていく前に、まず県内施設の「解体新書」を調査してわかったことをまとめておきたいと思います。

県内施設の「解体新書」は、いずれも1揃がきちんと調った(5冊が寄せ集めでない)ものでした。ただ、表紙はその揃の中では同じ料紙(厚手の色紙。押模様があるものもある)で統一されていますが、揃毎では異なるものでした。

そして、状態が良いものは福井県立図書館本と小浜市立図書館本で、最も美品は福井県立図書館本です。

ただし、小浜市立図書館本はその伝来も考慮に入れる必要があります。というのは、他館の本が「購入」という手段によって所蔵することになった(伝来の由緒が判明しないことが多い)のに対し、小浜市立図書館本は小浜藩主であった酒井家が小浜市に寄贈した「酒井家文庫」の中にあり、藩主の手元にあった本であるためです。

杉田玄白が「解体新書」の原書にあたる「ターヘル・アナトミア」を藩に買い上げて欲しいと願った時、高額であったにも関わらず、「玄白ならば、この本を無駄にはしないだろう」と信じて買い与えたのが他ならぬ藩主の酒井忠貫であり、この経緯から酒井家に旧蔵されていた「解体新書」は玄白から御礼として酒井家へ献上された本、すなわち初版本かそれに近いものである可能性が高いのです。

福井県立若狭歴史博物館本は、平成26年(2014)の常設展示リニューアルに合わせて古書店から購入したものです。本文編の冒頭部から筆による書き込みがあるのが特徴で、この書き込みをしたのは眼科が専門の人であるらしいこと、また最後まで書き込みがないことから、書き手は途中で「解体新書」を利用して学ぶのを断念したのかもしれないと思わせるような点もあり、書き込みのない美

品よりも引き出せる情報量が多くて、当時の医学の学び方を考えるための歴史資料としても面白い揃です。

(3)県博の「解体新書」

以上3館の「解体新書」は紙の質もよく、書き込みの有無に違いはあるものの、ほぼ同じ上物で、「広告」はどの冊にもつきません。

それに対して、県博本は上記の「解体新書」と比較すると3つの特徴があります。

1. 紙質が他館本と比して著しく荒い。
2. 版本文編4冊目に2丁分の広告が付される。
3. 本文末尾に「安永三年甲午仲秋　東武書林　室町三丁目　須原屋市兵衛梓」とあり、版元の須原屋の市兵衛の所在が「室町三丁目」と記されているが、「三」の文字に手が入る。

1の紙質の悪さは歴然としていて、県内他館のものを豪華本と例えるなら、県博本は一般普及本といった印象です。

安永3年(1774)仲秋に刊行された「解体新書」は、まずは献上され、ほぼ1年後の安永4年9月27日以降に須原屋市兵衛によって販売されたとされるので、県内他館本は献上本であり、県博本だけは普及本で安永4年以降の刊行とみるべきでしょう。

そして、2の広告によって刊行年がさらに絞り込めそうです。

末尾の広告には、64冊の本が紹介されています。「解体新書」自体も「解体新書」の前に発行された「解体約図」とともにラインナップされていますが、ポイントはこの広告の中に「文乃しるへ<古き文の詞よせ、近刻>、五冊」という本の紹介があることと広告最後の本が「誹諧名所方角集」(誹の字は原文通り)であることです。

松田氏は、「文乃しるへ」が後に「文栞<ふるき和文の緒躰を集む>、八冊」に差し替えられること、また広告末尾に「誹諧名所方角集」が無いもの、「誹諧名所方角集」が記されるもの、「誹諧名所方角集」に続く広告があるものなど、数版があることを指摘しており、これに従えば、県博本は京都大学附属図書館所蔵「解体新書」(7−05/カ/22)に近く、広告の最後の「俳諧名所方角集」が出された安永4年12月25日以降、かつ「文乃しるへ」が「文栞」に変更となった安永7年3月26日以前に刊行されたものと特定できるようです。

3の「室町三丁目」の「三」の文字に手が加わっている点については、「室町二丁目」と記される京都大学附属図書館所蔵「解体新書」(富士川文庫、カ/311)と比較すると、京都大学附属図書館本が「三」の一画目を版木自体から削り取って「二」の文字に修正しているのに対し、県博本は紙に刷った後に「三」の二画目を削り取って「二」にみせようとしています。ここから察するに、「三」から「二」への修正方法としては、一画目を消して「二」とする方が無理のない通常の修正ではないかと思います。

松田氏は先の研究で、須原屋市兵衛の転居は室町三丁目から二丁目への移転が正しいと結論していますが、最近までは二丁目から三丁目への移転が通説とされてきましたので、県博本にある「三丁目」の痕跡は、古く見せるために意図的に手が加えられた結果とみた方が妥当でしょう。

以上から、県内施設の「解体新書」との比較によって、県博本の位置付けを再考してみました。

県博本は、初版本ではなさそうですが、それだけで価値を判断してはいけないと思います。

県博本のような「解体新書」の普及本の群を多く見つけ出すことによって、一般に「解体新書」が販売され、流布していく歴史的背景にも目を向けていくならば、まだ研究の余地がある面白い本だと思うのです。　(有馬香織)

画像a　「解体新書」の頁で最も有名な解剖図の扉絵(県博本)

画像b　「解体新書」末尾の書籍広告(部分・県博本)

研究ノート

『北陸道細見記』にみる幕末の越前

当館が所蔵する『北陸道細見記』(法量：13×16cm)は、京都から会津までの途上にある宿駅や町・村、旧跡などについて、イラスト入りで記載した冊子です。この『北陸道細見記』を検討することによって、この冊子が編まれた頃の北陸道沿線がどのようなものであったのかを明らかにすることが出来ます。以下、本稿では、『北陸道細見記』に描かれた北陸道沿線の各地の中でも、特に越前における記述について述べていきます。なお引用にあたっては、適宜句読点を補い、ふりがなをふったほか、必要な情報を(　)で補いました。

『北陸道細見記』は、誰によって、いつごろに編さんされたものなのでしょうか。この資料の中に、著者や製作年代を直接に示す記述はありません。ただ、滑川駅などについて書かれたページに貼付された付箋には、７、８年前の大地震で「リヨウゲンジ川」の奥の山が崩れて水を塞ぎ、三日ほど経ってから決壊したという記述があります。この地震は、安政５年(1858)に起こった飛越地震のことで、文中の「リヨウゲンジ川」とは常願寺川のことだと考えられることから、この資料が書かれたのは、慶応年間(1865～1868)であったと推測されます。また、当時の緊迫する関西の状況を踏まえれば、京と会津の間を旅している本書の著者は、会津藩の関係者であったのかもしれません。

では、『北陸道細見記』の中で、越前国はどのように描かれているのでしょうか。

『北陸道細見記』の特徴の一つに、道中の各宿駅に対する著者の評価が記されていることが挙げられます。『北陸道細見記』における、越前国各地の宿駅に対する著者の評価は、下記の【表】の通りです。

『北陸道細見記』を読むと、著者は宿駅の大きさや宿駅内の家構え、宿の数などによって、「上ノ上々」から「下ノ下々」までの評価を行っていることが分かります。越前国では、板取宿が「泊ヤモ茶ヤモナシ」として、脇本が「泊屋ナシ。貧村也」として、それぞれ「下ノ下々」の評価を下されています。このほかにも、「泊屋三軒見ユレトモ貧村ノ体キタナシ。可被泊有様ニ非ス」(湯ノ尾)、「小貧村」(上鯖江)など越前国の多くの宿駅に対して辛口の評価が目立っています。一方で、福井は「町八丁、幅ノ広キ北道一番也。家中ノ立派モ又一也トキク」、府中(現越前市)は「町幅モ広ク中頃ハキレイ也。且賑ヒタルヨキ処也」として、それぞれ「上ノ上々」、「上ノ下」の評価を下されています。なお、同様に、金沢、高岡、富山といった北陸の都市も「上ノ上々」と評価されています。

それぞれの宿駅のほかにも、『北陸道細見記』には、道中で筆者が関心を持ったことが書かれています。

例えば、湯尾峠では「此坂短ク四五丁ナルヘケレドモ急也。此店ニ女化粧シテ居テ餅ヲ鬻(ひさ)クニ客ヲ呼声喧ク手テ招ク。佐夜中山ヨリ猶ハケシ」として、峠で餅を売る女性の姿が記されています。土地の名産品に関する記述も多く、福井では、「雲丹ノ名物也。干肴モ越後ヨリハ高ケレドモ江へ来リ見レハヤスシ」として、

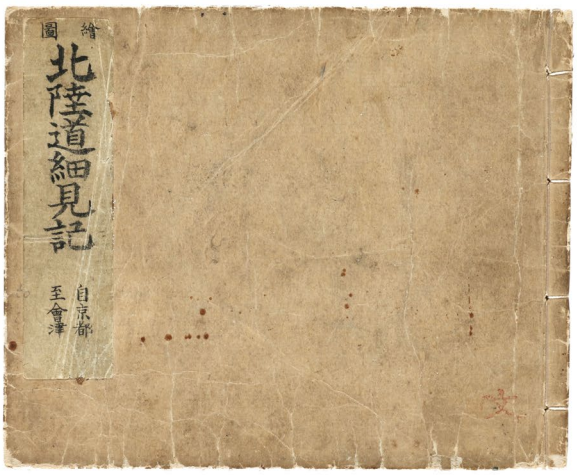


写真1　『北陸道細見記』表紙

宿駅名	評　価	備　　考
板 取 駅	下の下々	五十軒と也。泊やも茶やもなし。
今 庄 駅	下 の 上	
湯ノ尾駅	下 の 下	百三十軒計。泊屋三軒見ゆれとも貧村の体きたなし。可被泊有様に非す。
鯖 波 駅	下 の 下	六十六軒。泊屋二軒見ゆれとも貧村きたなし。
脇 本 駅	下の下々	泊屋なし。貧村也。只一軒大庄屋とて瓦屋粉壁大家あり。
今 宿 駅	下の下々	小也。貧也。泊屋なし。
府 中 駅	上 の 下	町幅も広く中頃はきれい也。且賑ひたるよき処也。三千軒余之由。
上鯖江駅	下の下々	小貧村。
下鯖江駅	中 の 中	小なれども賑ひて見ゆ。尤も飲食屋豊也。町の長さ漸六七丁か。併きれいの方なり。
水 落 駅	下の下々	百軒計あれ共泊屋なし
麻生津駅	下 の 中	
福　　井	上の上々	町八丁幅の広き北道一番也。家中の立派も又一也ときく。入口より出口迄一里半なりとそ。
舟 橋 駅	下 の 下	
森 田 村	下 の 上	茶屋あり。下の上。
長 崎 駅	下 の 上	茶屋なし。
金 津 駅	中 の 下	
細呂木駅	下 の 下	

【表】『北陸道細見記』中の越前国宿駅

雲丹が名物であったこと、干し魚も越後よりは高いが近江よりは安価であったことが述べられています。また、「センソク村」(＝千束村、現あわら市)の周辺では、「此辺左右豆麦畑也。又茶ニ油ノ木多シ」、「瓦ヲ製ス」などと記されています。

こうした筆者の関心は、道中の伝説にも向けられます。次の一文は「よめおとし」と題された記述です。

> 或土説ニ坂井郡十楽村ノ一人ノ嫁(よめ)仏ヲ信シテ毎夜吉崎ヘ参ヲ其姑是ヲ怪ミ密男ニ通フカト疑ヒアル。暗夜ニ此坂ヲデバヲ以テ待設鬼ノ面ヲ蒙リテ彼嫁ヲ捕ヘ威シテ云此ヨリ思ヲハ切テ此谷ヘ落スヘシト云ハ嫁泰然トシテクラハヾ食ヒハマバハメ金剛ノシンニハ歯カ立スト云テ少シモカハル体カ無リシカハ姑ハ嫁ニ順ヘトモ其鬼面トレヌユヘ弥仏威ヲ恐レヨリ嫁ニ伴ヒ吉崎ニ参

現地の者に尋ねたのか、ここでは「嫁威し」に関する逸話が紹介されています。

『北陸道細見記』には、地域を襲った災害についても記されています。この年の5月15日に新発田を発った筆者は、木崎(現新潟市北区)にて船に乗りますが、猛烈な暴風雨に遭遇して「身体ヌレヌ所ハ骨計リ也。尤寒クフルヘタリ。荷物ハ陸ナレドモ川ヘ落ル如濡タリ」という有様でした。この暴風は広く被害をもたらしたようで、各地で被害が記されています。越前国でも、麻生津駅の記述に「此村ノ川ハ檜ノ山ヨリ出ル川ニテ此十五日ノ大アレニ洪水シテ畑ヲ流シ此一村ニテ千金余ノ損也ト云」と記されています。また、九頭竜川についても「此十五日ノ大アレニ此川溢レ処々ヘ決流田畑大ニ痛ム由。此村入口之辺モ道損シ田ヘモ沙(砂)ヲ押込ミテ見ユル処アリ。此辺ハ川ヨリ余程離レタル処ナレドモ決流スト見ヘタリ」として、その被害が甚大なものであったことが記されています。なお、『福井県史』の年表によれば、慶応２年(1866)の５月15日に小浜で風雨大洪水があったことが分かります。

また、北陸道における物価の比較も記載されています。板取では「米五百八十文。三十文下ルト云。」と、「トバ村」(＝鳥羽村、現鯖江市)の付近では「黒米四斗六升二両二分也」とそれぞれ記されていますし、金津付近では「白米五百六十文。越前中ニテモ高キ処トハ云トモ加国トハ大変違也」と記されています。越前国の米価は、加賀国に比べて高かったようで、大聖寺付近で「加賀領ノ内ハ白米一升二百八十文位。三百三十文迄ニナル。今ハ下ル。僅カ四里半、越前領ニ入レハ米直(値)騰躍驚クヘク、恐ヘシ」と記されています。

『北陸道細見記』には、このほかにも、藩領ごとの通行手段や各地での遊女に関する事柄、道路の良否に関する情報などが地域別に記されており、当時の旅のようすがうかがえます。

今後も『北陸道細見記』のさらなる検討を進めて行く必要があると考えています。　　(橋本紘希)

写真３　福井

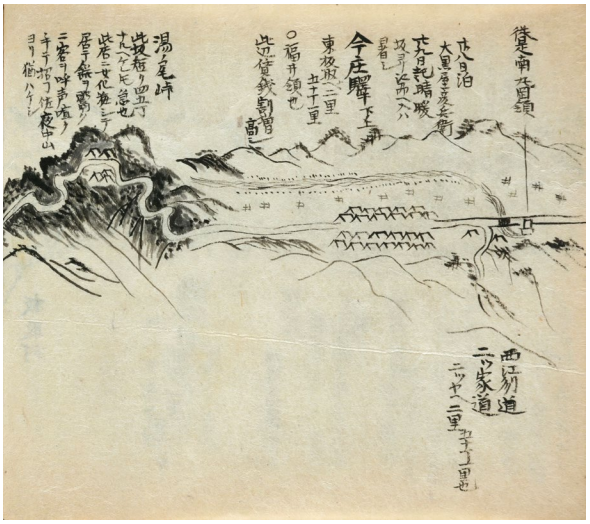


写真2　湯尾峠

写真4　ヨメオトシ

博物館日誌（令和2年9月～令和3年3月）

9月

- 18日㈮
  春江東小学校　来館（団体対応）
- 19日㈯
  歴博講座「姉川合戦図屏風～描かれた人・馬・物～」（講堂）
- 25日㈮
  武生第三中学校　来館（団体対応）
  武生第六中学校　来館（団体対応）
- 30日㈬
  岡保小学校　来館（団体対応）

10月

- 1日㈭
  福井農林高校　来館（団体対応）
- 2日㈮
  山代小学校　来館（団体対応）
- 6日㈫
  春江西小学校　来館（団体対応）
- 13日㈫
  野木小学校　来館（団体対応）
- 15日㈭
  木田小学校　来館（団体対応）
- 16日㈮
  加戸小学校　来館（団体対応）
- 20日㈫
  湊小学校　来館（団体対応）
- 24日㈯～11月24日㈰
  特別展「明治から平成　皇室とふくい
  ～行幸・行啓の記録と記憶～」（特別展示室）
- 24日㈯～12月27日㈰
  日本遺産認定記念写真展
  「旧北陸線いまむかし～鉄道遺産をたずねて～」
  （エントランス）
- 27日㈫～29日㈭
  福井高校　来館（団体対応）
- 30日㈮
  片上小学校　来館（団体対応）
- 30日㈮～11月16日㈪
  日本遺産認定記念写真展
  「旧北陸線いまむかし～鉄道遺産をたずねて～」
  （敦賀市 きらめきみなと館ロビー）
- 31日㈭
  フレンドリーアート号

11月

- 5日㈭
  円山小学校　来館（団体対応）
- 12日㈭～13日㈮
  森田小学校　来館（団体対応）
- 17日㈫
  麻生津小学校　来館（団体対応）
  下庄小学校　来館（団体対応）
- 18日㈬～12月6日㈰
  日本遺産認定記念写真展
  「旧北陸線いまむかし～鉄道遺産をたずねて～」
  （南越前町 昭和会館3階大ホール）
- 19日㈭
  静岡市議会議員視察
- 20日㈮
  順化小学校　来館（団体対応）
  福井東特別支援学校　来館（団体対応）
- 21日㈯
  歴博講座「昭和8年の陸軍特別大演習とその時代」（講堂）
  フレンドリーアート号
- 27日㈮
  中藤島小学校　来館（団体対応）

12月

- 4日㈮
  河合小学校　来館（団体対応）
- 16日㈬
  高椋小学校　来館（団体対応）
- 17日㈮
  大関小学校　来館（団体対応）
- 18日㈯
  名章小学校　来館（団体対応）
  かつやま子どもの村中学校　来館（団体対応）

1月

- 3日㈰～2月14日㈰
  企画展「越前・若狭　願いの形」（特別展示室）
- 3日㈰～2月28日㈰
  写真展「「福井駅前」メモリアル」（エントランス）
- 21日㈭
  南条小学校　来館（団体対応）
- 25日㈪
  上志比小学校　来館（団体対応）
- 26日㈫
  平章小学校　来館（団体対応）
  岡本小学校　来館（団体対応）
- 28日㈭
  松本小学校　来館（団体対応）
- 30日㈯
  歴博講座「山川登美子の父
  幕末の小浜藩士 山川貞蔵」（講堂）

2月

- 3日㈬
  大石小学校　来館（団体対応）
- 4日㈭
  美山啓明小学校　来館（団体対応）
- 5日㈮
  鳴鹿小学校　来館（団体対応）
- 6日㈯～7日㈰
  企画展「越前・若狭　願いの形」展示説明会（特別展示室）
- 9日㈫
  社北小学校　来館（団体対応）
- 12日㈮
  志比北小学校　来館（団体対応）
- 16日㈫
  付属義務教育学校　来館（団体対応）

3月

- 1日㈪～4月28日㈮
  写真展「さくら咲く、ふくいの春」（エントランス）
- 20日㈯
  歴博講座「ふくいの「美」女神像」（講堂）
- 27日㈯～4月25日㈰
  特別公開「糸崎の仏舞」（特別展示室）

※1月10日㈰より1月12日㈫まで、大雪のため臨時休館

特別展　福井県野球物語 ―甲子園をめざした高校球児たち―

開催期間：7月23日（金・祝）～8月31日㈫　会期中休館日なし

観覧料：一般400円、大学・高校生300円、小中学生・70歳以上の方200円　※20名以上の団体は2割引

［編集・発行］

福井県立歴史博物館

〒910-0016 福井市大宮2-19-15　TEL.0776-22-4675㈹

https://www.pref.fukui.jp/muse/Cul-Hist/

ふくいミュージアム

No.63　令和3年6月25日発行